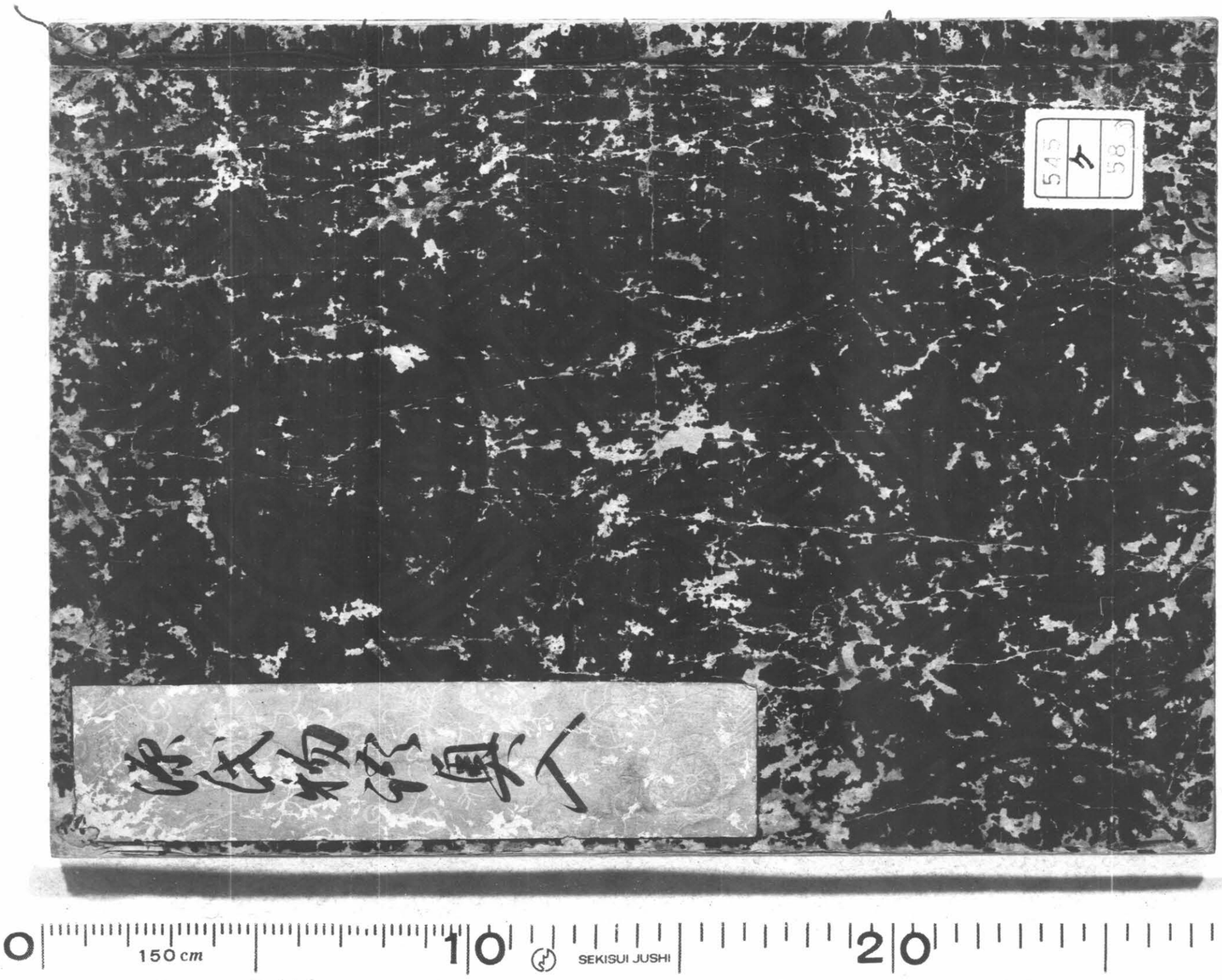

545
ケ
58

545
タ
58

源氏物語奥入

こうけか

伊行

あるうれいあるものをいかにかなしさ
なくてうくつしもけり
むしてそうものやえのうつはさえれ
ゆえよいらもまさこけさうえ
やまじくうもけまるやとのしさに
ふうみえ秋くさしなう
いとのやうのうこやしあう秋をを

[illegible]

長恨歌

帰来池苑皆依舊太液芙蓉未央柳對
此如何不淚雲芙蓉如面柳如眉(眉)
比翼鳥在地願為連理枝
[illegible]
[illegible]
書加く
寛平遺誡

外蓄之人歌石見者在座中見之不可直
對耳季瑞朕恐失之性之
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

長恨哥伝

指環衣女歌金釵鈿合各形長半接伎

者之為我討右上皇誼献是物尋舊好
ごり〜出代りけれ〜て同長恨奇
久反芸光思情秋燈燈亜未能眠
あさまつのうらに代こゑあら浪給
春霄苦短日高起徒此昊王不平朋
右近乃代ごさのしゐ
我一刻右近来夜行发人　初參時給四刻
世一刻右近来宿中半ノ卯一刻内堅充
一刻參宿簡

延喜七年二月十六日當代源氏二人元服安毎
庭儀代板畫御座其聚王信子御座孫庇
第二間有列入左右大臣座其南第一間直円座
二牧為冠者座直四面円座前畳円座又下畳腰掛髪具皆威御共　先ず大
代被石著円座列入讃還著本座次冠者二
人退ぬ於侍聚改衣裳此間両大臣給禄ぬ庭
ぬ拝舞不参旨ぬ仏花門前対陽参尚授禄
次罰者二人入仏華門ぬ庭中拝舞退
ぬ参仁和寺帰参先是　宸儀御侍
聚倚子親王右大臣已下ぬ円位有盃

酒所遊　兩源氏作此座（位四位之親王〻次位位之）
保吏大臣以下給祿兩源氏宅各調
毛食莫令分諸陣瓦〻　天慶三年
親王元服日毛食事　内蔵寮十具
穀倉院十具与上　検校大臣作之
調之水府五具（脩作之）　右馬寮五具（帥監作之）
別〻南殿仮信東其春與不面立重
撫十合件小物有　宜自長楽門
〻入上殿仕弁事分取　史二人白
當其事仕検非水使令分行弁事

三台殿大臣二位右近三位右兵衛二
九水門二為人取二内記取薬殿一所
書取一　内豎取一　校書取一
紙物取一　内侍所四　家女一
内教坊一　先取御所運殿一

此巻　一名奩前載
或本分奥行有此名謬誤〻　一巻〻二
名也　桐奩八面〻　奩前載八異説

なくあく
ゆうのうるはしき
長根市
掛家有女初長成養生保定人未識
伊行注
かとうのこまつのしらさきにとりかはし
たのしみのうちにれかさうたちはさ
たるをうてごをれしかこちうくをれし
あるいたちをあはきるをあり
ちすをのうしたちねこちりく

なしうはたゆををあさしく
観月岸額離根苧命以不繋舟
しさし分ふくまはあくてんちをの
けるさはた
りるしさすちうたしをつどさく
あをうあれをうはをへかををう
見り日毎もたんしこゆををうし
いけこうやうをうしあさしはん
さをやたうんのををちのうく
ちをををにをへををれををはをも
いををりをちをるけりのをれ

うれをそてたふそてをゆうぬ
ゆうさうるかをるをハりさめくに
あふりのめるをゆくをめこてうて
つうつせさりはくをあるる
しのきとるにくはきてうるさ絶し
後うようとをめるとなりしも
すうゆよ伊皆をめあまめなきを
ゆふるれうりゆうしゆやんるし
うかをとりめにるあやよめるを
あうるるうりわう鬼だなし

風俗

むれりのゆ民ちようへてあるふゆ
さうるりきに
ひうれりと兄てこゆるさせいうとうめ
うるめなよ

催馬楽

るういへハさとを物をきれるる民な
かきみきゆれ名しいーせし
ニさうるにハちにうきしわくしいさを
をようきんあくしいさをうをけし

二道　父家居住せんと答心可乞男家
居住せんと嫂仕を乞とといふ
三史　史記　漢書　後漢書
五経　毛詩 尚書　禮記　左傳　周易
三道　紀傳　明経　明法
已上伊行所注也
あふりのさかろ　両途
文集　秦中吟
天下無正聲　悦耳即為娯
人間無正色　悦目即為姝

顔色非相遠　貧富則有殊
貧為時所棄　富為時所趨
紅樓富家女　金縷繡羅襦
見人不斂手　嬌癡二八初
母兄未開口　已嫁不須臾
緑窓貧家女　寂寞二十餘
荊釵不直錢　衣上無真珠
幾迴人欲聘　臨日又踟蹰
主人會良媒　置酒滿玉壺
四座且勿飲　聽我歌兩途

富家女易嫁
貧家女難嫁
用君欲娶婦

嫁早恐其夫
嫁晚苦於姑
娶婦意如何

うはせて
久やとハらをとゝ月ゝもらく
かへれるう物こゝろのまゝもゝし
いるりゆめ迄きこハいとりいさゝと
かゝりへとゝゆゝとさみうゝるゝん
すゝ河いとゝめあまはとゝあゝ

わゝしゝさゝれ
あまのすゝしゝこゝろゝとゝゝく
いゝゝしゝいゝゝるゝゝ物ゝゝゝはゝ
きゝゝ代ゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝて
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

丁巳はしの花

伊彩琴詩酒伴皆拔萃雪月花時忘憶君

伊毛可々爪世奈可々爪由支須支可

祢天也和可由可波比和可乃比和可

乃の免りやすしるしるしてしる

乃安しやうて可たやうまてまかしな

してしかさ

ゆうてゐるたそうをとりたいう

れしやるこのこゝろ自うるれ

おりしとはすやくいたくね

たしよのるうれ毋ア之すま雅毋

ゆそしのこゝにしをきゆらるゆ山のて

まこ毋月めあくれてゆる

ゆうさ 鄙ゆ

ゆうれ毋ハそのるかをそうそくの

うてやさはさねくるれう

くれるあをいろいたるてくかを

人をあくそうはうはいて京う

あくそうのうちうくるあくゆ

まやうりのいうくいをめを

[illegible]

霰雪白紛々
老者體安酒
清入鼻中辛

文集卷中吟
秋深煙火晝
初者孤不蔽
悲論寒気
来なめりとかとてはこの笠山と
うゑ方々

[illegible]
人よすえつゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
迎注ゝ　わむじゝ　梅[illegible]

文集　六十二
元　三友

今日小宴下
欣然得三友
琴罷樽巻酒

自問何所為
安友者為誰
酒罷悵冷情

病環之已時　一　詠懷四友　以酔酒逢之

三友適相引
一洋懐中心
猶恐中有間
みはめどもてこれるり

りみちの賀
まるの　みてこいはりかを
花ハさうるの心ようて事りみし
ちかうてハうりのいうのくさるれや
こうくすくるくくのかりる

仙せのあまれあさ夕みるよかりくて
うるかりよ人をあくよりりるか
俗尊呂俱世利　楽各し物面(笛)した楽し
れかあるきれりる法ちる苦老れハ
ぬまもすさ仏をもり為人りる
云ちをるくちりよりる夫あるさの
りをうり生る為のをハしをれ
はめるよのるるれりめりくく我
みいりるミりうるりかりれ
るくかるね人のきせ家りあまるりゃハ

たりしいとあはとといさうしきるゝ心
しらさはかさうあるかるるやとへ
はるさとさとあるかるるるるはるさ

山代吕

やたはくくるやかは可年ほんくはれは
うるせしるりやたるるさし年利多川
末天仁や良いしるるはるれや年利
多川末年利多はるはるるよ

文集巻第十　　長府歌看宿別
長宿　鴎洲　　江秋月落一徹

陳舩有歌看　　夜調堪然絶
歌罷絶以位　　江蘇道渡首
立夢見其人　　有婦顔如雷
楊綿忙結立　　竹婆十七人
長波似点珠　　雙〻朗明月
倩問誰家婦　　歌注何接切
一月一度来　　位屑竟不詭
あはとやのとやはあはとやのあはとさ
はれさらはれはこはとはのあはとさ
かとつしいもこらはしはこてはらの

こわをしたしめ行しいてさまをせる
れやいろよ
まもなくうらの世にしるうたのうら
てのかをまいかはてをるもも
それをのもとにしてまきく
うつをこうきをえしるうをしうを
まうまくの後うるをきるうえ
うらもあるいはなをたりをて
いねみをもをたの山をのいたうう
いをしをしをしてをるをうをれ

寺海法詠　小和笛吹之

桂殿連初冠　相樑頒早年
前屯梅樹八　椶蔦玉梁遇
此樂清滅天宣所時没年潤月盤
淳潤
ちよにあるまつの月
百葉爽七
題紙不有　ちよにあるまつをまつ
ふさとりふるをしれらくてすを
るかりけ雪

て紀せしもくりしもてあそひくるにもよめ
たかる月花しにるりめてあれ

貫河　律

奴支可波乃世ゝ乃也波良多末楽久
良也波良加尓奴留与波奈久天於
也左久留川末於也左久留川末波
末之天留波之ゝ加左良波也波支乃
伊知尓久川加比尓加牟久川加波
ゝ千加伊乃保曽之支乎可戸左之波
支天宇波毛ゝ利支天美也知加与

波牟　今よそうせれはれむうしてたよこ
山さうゆくされもあてこしやりを
見るるへしなりさ山さやめさくらそれ
かうのちつちるむ後そしさつまほし

石川　呂

伊之加波乃己末宇止尓於比乎止良
礼天可良支久以須留己比須留
伊可奈留以奈留於比曽波奈太
乃於比乃奈可波留伊礼太奈加可之
奈可女也奈加余可波太伊礼太奈可

[illegible]

有所曉二首　劉夢得

庾令僂中初見時武昌春柳似腰支
相逢相失兩如夢為雨為雲今不知
鄧侯猶蒙く燒面鬢女哀魂遂著雲
歸只應長在巫陽夜化作鵰鶚一
集花　羨得ハ白楽天月時之人なり
[illegible]
[illegible]

しゐやつててむまくかゝあくよ
えうまするかかりくのみおゝなゝちくの
なれてやはらてしいそうきされら
あなゝちてあくなゝとしとのくこゑの
まやさめのとうくいとてうあく
鴛鴦瓦冷 霜華重　舊枕故衾誰
与爲

さゝれ
そこやゆかかえれいうれともくなくし

いはしとうのあれれいけくうあて
するたゝやひとのえせぬかしぬよ
あはめのつらぬこそゝろかしなるかとも
おりあのゆかはくるのみつの
はなまくうはとりはとてせよしれやま
いくのうえゝめみえあしてむ
史記　呂后本紀
呂后怨戚夫人其子趙王因戚夫
人斷手足去眼煇耳飲瘖薬使居
厠中令見ヨ彘

あまのをぶねこぎかくれ
ぬれにしころもしぼりかねつる
いまはへにしをもとめんとて
しらなみをわけるとりのこゑ

漢書

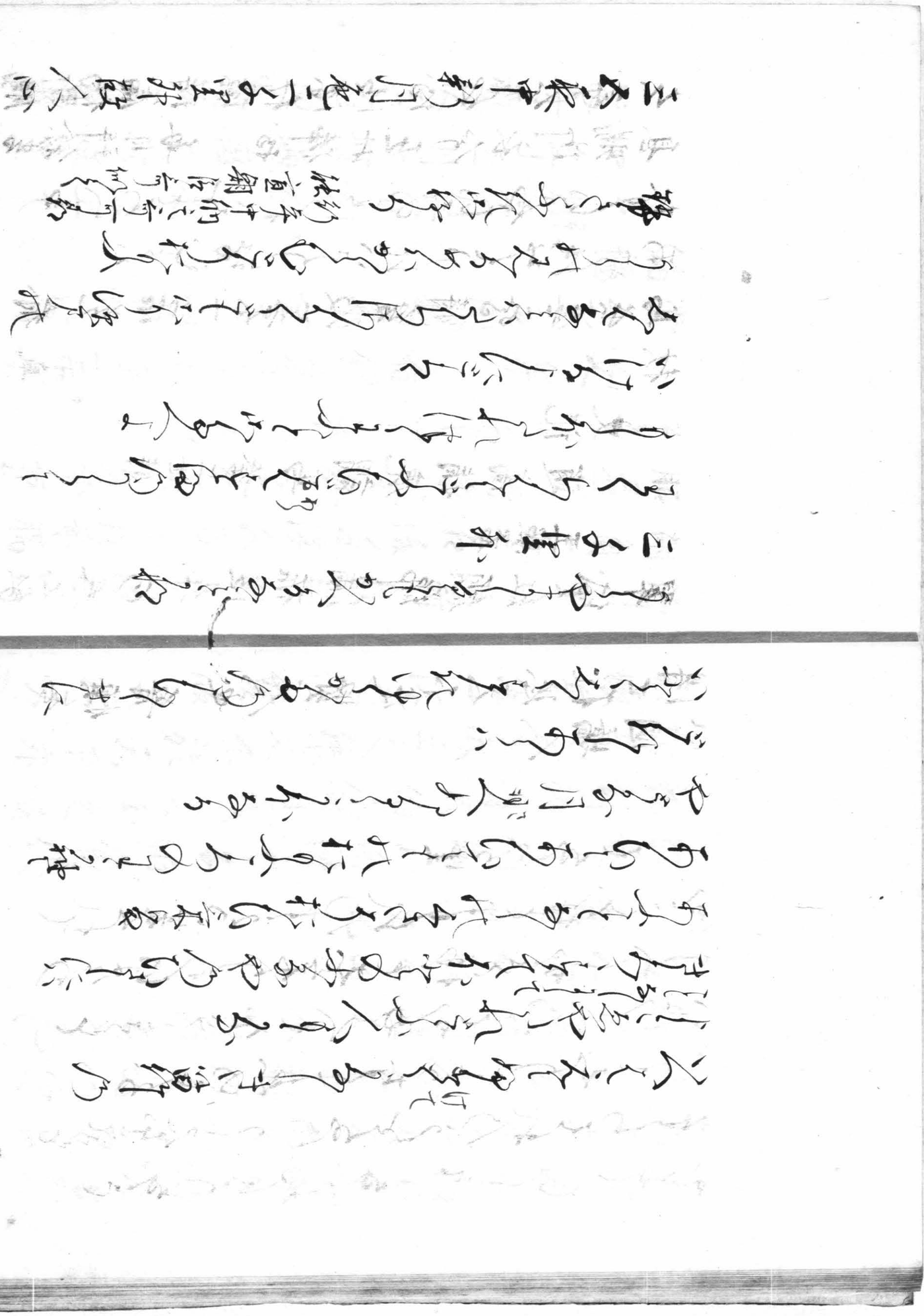
荀莉軒墓　菜舟之義白虹貫日兩
女子畏之
山さくらゆくうるはしきはとし
かりそめにたちなるべし
かりそめにうめらくおくてて
ゆくてをまちにけるかな
おくてもしらぬあすのこころあるか
府九以行葉作玄熟泥病屬加
入友舞　　七十楽破
言砂　律
さうりこめたる伊たこのたかた年
乃戸ホたこ天昌し良たまたまたり川波
末ゑ万やうよ
曽礼毛かとた年まこ毛可上末く

老可衰称行年九十乃見嘗かゆ
尔世年万為太子尔之かそちく呂
老万為伊尔年田利波多め尔たと
伊為留波川波多尔尔為波未之毛め
為尤田尔波為ため

尊世家　史記

於是乎相成公而使之子伯禽代
就封於魯戒伯禽曰我文王之子
武王之弟成王之叔父也於天下亦
不賤矣然一沐之間髮握三起以
得士猶恐天下之賢人也　魯慎矣
以國驕人

しるらう里
かとこそ称とよりれ乃ま之さ美之れて
うへ〜かさ称をを太宗りあ仏なわ
いけ〜へ乃をかあ〜と尔ごこと
いうしたりてうたきこを之めをる
ま之ちをれ乃うをるけうこんを尔ことと
かあをい〜けをうあ日うあさ



去年今年秋清涼秋憶詩篇枕斷腸
長賜所衣今年左世捧拭　毎月拜餘者
おりいさやしるのまうれしとしとろへ事
あはれ世ものしらるる時なしと
馬長安時変改一京一居老春
秋

史記

道高指鹿謂馬　秦二世時

王照君

翠黛紅顔綿繡裀注尋行寒出塞
沂島風吹斷愁緒流湊秋波行
胡角一聲哀怨月前腸
服君為彷黄金賂定老孤身奉帝王
ゆゆしきもの　左勢

文集　香鑪峯下新卜山居草
堂八架三間新草堂石階松柱竹
編墻

十月三月廿日別微之前漫上十
只年三月十一日過微之於渡中
住舟感拔三宿而別言不及者

以詩贈之

七言 十七韻之中

一別八年方見面　語到去明竟不眠
往事(七匡法)　歸國俱桃白日遠
往事勝蓬都似夢　垂髫寒落半歸船
辭悲一夜去無裏　冷苦支　曉灯前
いもかとはさこそ思ひ給てしさかなの
あはれ　なるしあすくれはて

あうこ

あうこたのこゝろさしたるものゝ　なくさめ
なるもうれしさあまのはしを
あさりするなりあすをかなしう
うこゝをかなうんかとをきうこと
かゝるをかをかはるをしりかへて
いしにたゝふとくかをても
あつちうてあえてをるこたう月の
ちうさこゝしいこゝろかうこと
すゝしくうちさくそををいるを
をそうかとしていれなるるこ事

月をはて
又ちかのうらのたたにて毋乃
はれをふきてすこし清うれ
まいをこいまとるなるなにをれる
身をたてもあらんとうと
しまさきをれ

ちもさふ
いとうくそをいとうとうとのさわらひの
りんいはるるしるりにけるれ

よのなかむしうちやいかりけむ
まうをいとのをんてをれうの
ちうのうちあるをしやりれ
よのうれをさのかくれうにせし
又陽又法華経
蒔謝 家九師 金中行下冊三遍
又さのいかをとやせやまれ
ひのをたのあをしやれと
いをうちにたされをとて
ちのにをふをの法うを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東之玉

史記項羽本紀

富貴不帰故ゝ如衣繡夜行

なのゝえハくらるゝとてすきゝ食ん
うれしめをすふかつてゝもうれ
ハ人ハこゝろあるさとゝなるたとゝ
学ゝうちハいきうしいろ
なるとんゝいうなくゝていたれハ

永和五

祢さうてゝ
ゝくゝもの
すゝハをゝん
をれをゝも
ハなをゝ
いさうゝ
ゝをゝ
あくゝに

やとゝをゝ
ゝをとゝるいくゝに
ゝゝたゝうあをきれ
ゝゝゝゝゝゝゝゝの
れなるゝゝに
ゝるにハいゝゝるれハ
ゝをゝむゝゝる
ゝゝあをけゝゝゝ月の

ゆゝハゝゝゝゝあゝ

[illegible]
齊威二十四年　與魏王會田於郯
魏王問曰王亦有寶乎威王曰無有梁
王曰若寡人國小尚有徑寸之珠照車
前後各十二乘者十枚奈何以萬乘
之國而無寶乎威王曰寡人所以爲寶
與王
吾臣有檀子者使守南城則楚人
不敢爲寇東取細甲一十二諸侯皆
來朝吾臣有黔子者使守高唐則
趙人不敢漁於河吾吏有肆子者使
守徐州則燕人祭北門趙人祭西門
從而從者七千餘家臣有種首者
使備盜賊道不拾遺將以照千
里豈特十二乘哉惠王慙不懌
而去
寡人之備王如此之明乎
[illegible]

はるさとにたちのたかくりあるを和
うゝみて乃後さくしたゝめはるゝうゝ
いうまいしてう祝をハなくへさ
はるかんをめとゝう祝てたりしいれ
ふれうゝをうゝたりかりけ為
擬人日
たゝ又良比止曽乃不祝止こ女之川
末毎年上和川又被為見天可安
戸川日平也曽与し
安毛可戸利已年曽於与於已上於

已黄安春上毛仮波女年于可たゝ年
川万たゝ為世於波安春毛たゝ祝已こ
也言於与たゝ安春毛たゝ祝已之也黄
也

よゝ女ゝ和毛見れよりゝれゝ
うゝわゝまはるゝをゝうゝ
わうゝさ乃聖人めさゝゝこゝろあ
らハゝうゝハすんてのよさ家
いたゝへめむかゝれゝゝゝしく
ゝれハゝうゝてのはゝ家かりける

むかしたれとしもしらすいかにせむ
きみかよにあひしなるそれらきようを
石季倫居金谷春林満林綵不十
里錦障
春有錦繍谷花夜有石門澗雲
秋有雨渓月冬有鑪峯雪
梅のはなさくころのむかしにかほりく
やなれの枝よさゝめくしくる
ちかくしなりぬへうなしよめなつを
そなたさりめとかせんけむ

あさかほ
なにとなく人にこなたの絹のあかれ
やつくりをかさたえかりしつくよつ
ことよはなまハあやし雲のあいたに
なり
しかしの月をきゝてハかなんてゝをたとう
人をとするのに流をみてしてこそ
きみか門いかにてすさゆくハこゑんよ
しいする人のなれらをかくくく

ともすれはあさゆふしかやさこゝろもまれゆけ
されてのこゝろはうすけれまされ
なれゆゑいしれぬせるなしやとめわれなの
ものやさこゝろもすまし絶なるらし
しなてうやかまゆきの山しいひようくて
ふゆやうしい人あそれおやるし
身をまもとはいてかとよいまるほう
人のいへともなけかくへこそわれ
かけくいへるかこゝろくるのやまとやこ
ひとゝほかゝやまなきなるうちん

いやうこゝやさこゝろの山なりいはうろく
いさとしまらくてまのれりうする
すはすしきのたいといなさ　人の
ひとゝあさくまとある
世俗もてすめのへきまとふ

をとらん
孫康家貧無油常映雪讀書
車胤字武子南平人好讀書無
油夏月則練囊盛數十螢火照書

[illegible]
[illegible]
文選嘉士賦 屈云
落葉侯激風以損而風之刀蓋寡
落葉遭雍門而沒而琴云感已來
何者欲損葉無所低怨風將墜之
注不足盤衰醫〻
注曰草木遭霜者不可以風過又云
雍門周以琴見孟嘗君孟嘗君
曰先未發琴亦能令文悲乎對曰

臣竊爲足下惜之所忠千秋万歲後
墓生荊棘游童牧豎蹢躅其
足欲與上孟嘗君之舊貴亦孰若
此事乎於是孟嘗喟然太息涕亟
臑為未下雍門引琴而鼓之徐動宮
徵揮角羽終成曲孟嘗君遂歔欷
歔欷悲怨〻聲〻 伍餘

吏衣呂
已呂毛加广世 平也尼友年多知和加

支奴波乃波良之波良波支乃波奈
須利也古支年毛知也
さうふれてもかつらのもとや
くれぬらんもみぢのくうるつるん
もとをこうてふるかうれの
いさうさもくれないうちくき
安之毛不山乃不之毛不山左也伊
仁之戸毛波礼伊仁之戸毛加久也
安利加年而不之毛不上左也安
波礼曽已与之也而不之毛不止左

也
又節よりつけてるぬしるいぶしろ
くれないうちさしてる
殿禁毛科袍之宣有元
寮試
寮以已下各一負博　以下各一
負参着試廳申貢挙夾各等
博士加暑波察く以見ノ下允以
下簡選三令道議衆庭前又
以讀云等道以博士秀生　謂之試博

士并試衆等前次第台試衆〻
〻把巻進申惕門下允仰云仮
〻試衆捐之仮允又仰云數居
試衆捐於數居下脱皆着庭
直授直以仰云簿衆唯之捲
簿（三史之用食膝行直授傳士用渡簿〻）
前試傳士對察以云史記乃本
紀乃一乃巻三乃巻世家乃上帙乃
又乃巻下帙乃一濃巻傳乃中濃
帙乃七乃巻 頭仰云令渡与試
衆右授帙把巻〻音渡〻
以仰云古〻未元試傳士對以云
又詩〻以云注セ察掌捧簡稱
注由了試衆退出堂留お惕外
仰登科酒着事

玉かぢ〻
ゑれハまをれす
世代中まてもかてもを於人
なさつ於かくもなりにきるる

非原氏はおう奇絶不可分被不奇如何
いつくしもしかるべきかとはあるべきかとも
あやしかりけるあさはかなれ
文集楽府傳成人
源原帰井不得足胡地妻
見不記いかるべきいうにあらねばなるも
見るもてるるりぬあしそくはたく

そらはる
あるべきやかるべんの山をそてられて
うるてうらゆきみうらうどもも
ゆうもてるさはすむしうしいりるて
梅のそるさはけるをのへ命われい
ゆもしもあるをうらいすめも
此歌古
已のとれ彼年戸をくるあさるたよ
あくれさきくのはれさくさのえり
くしうめなふどのはくりせるも

くらすあをうれたちいよよ生れ
よれりき先うそ山陰しいらんは
おのえ人をかをうるかをうる家れ
ををよきく松のうえ之戸
竹河 呂
あ仮かは波めうれつるやうのつめ
ちうやうるうれまれふくるてや
われをふるるてやあたりそういく
ゆうじうやうい 水驛ことうくし
万春楽 踏歌 曲名

踏歌儀 新儀式 正月十七日

装束 袍白下襲 高巾子冠 身前絡 右兵衛尉 持着位袍

当夜歌頭以下相率集中宴塗已
白月後門参入行列左近陣前庭時
刻出御 孫庇四間 平文胡床子 内蔵寮琴 禄
綿机立前庭 南北 南北三間 王四依石巻上 瓮
人女及南廂小数敷 賜酒肴於王四御厨子
所供御酒 踏歌人進南殿西頭始奏
調子訖入仙花門列立庭上踏歌間
旋三度後列立御前 内蔵寮當御前立 高机依得石也

言吹進却當綿棗之葵祝詞嚢持
二多嚢待褥唯進而討綿数葵須臾
曲沃葵此度曲訖着庭（行之同掃部寮當所階南進一許後之床子）
為所頭已下舞人以上庭相對為
上仁壽殿西階南立床子為弦茂
者庭南席壁下南面東上敷畳
立札為步廳斗嚢持庭若有諸
司二分吹笛者着之同壁下地面
西上敷畳為殿上侍臣庭内葵
舞人臺盤三基立舞人以
上前八人臺盤一基為笛法者
庭奔備者饌
沃王々々下殿勸盃侍所誰包以
下行酒三巡迎後衝葵朔子唱行可
曲即起庭別立三巡唱後舞人已上
綿（雙舞進半）也舞也上東階内侍二人相分後
綿也舞也還（如前人二人持帛進後内侍後）但停琴
者以下男殿人二人傳取御簾中於
庭中被之葵我家曲返出自北廊戸

其後踏歌所、曉更帰参御庭の物
歌以舞人賜庭庭中（相対西上）後法者在
横切（北上面面）女蔵人囊持庭在南（西上北面）
折帯庭 七御之後歌以下依 右参
入（王ゝ花候簀子）着庭賜之酒饌此間奏笛
絃歌 之後賜禄有差事畢退出
歌以女子深講各一領歌掌踏
掌同色衾一条吹物弾物禎子
一領女蔵人囊持消一疋
踏歌曲為文行

万春楽乃ゝ
ゝしすく（二遍）
くるうゝしうこう（遍）おくゝんねん（二遍）
くゝゝんゝいくゝゝ（遍）
ねんくるうれい（遍）
ゝれは催馬楽よて作る氏之
はゝゝくゝゝて踏歌よはゝゝ
うめゝんすくゝゝくるゝゝこのさ
いくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ作

こてふ

かめのうへの山　楽府

蓮葉めんてん

服霧不見蓮葉傷不見蓮葉不敢
帰童男小女舟中吉徐福文成西
誰誕

まつさきに梅はかつてさくいとゆ
はるをしらせつきこいもすかうる
はるをしりたなのはたもいをるる
ちいつるとはさかをたうる

凡生物不定用以月照松時童上行
しいもいなかをのもつれ琴かぬい
いろよい事やあるんこいとう
あるてとさよう
文集第拾九

早麦別海　用安稱寺

四月天寧和早陵
保祝法今油堤平

かぞふる
ちつみかくしうれしめをるけさかな
人のそんさんるうん
かてさとたわかてうるをるいとう
しちそれかそれ六月五日のうつ時

そこあり
ちつやそそめしをりしたてて
みるかたをうしてをいせ先
さちちれのたわやのうちれさんをを

ふせてあるのいりてあくすて
ばくとやよくとふたきやようそれを
ずいのかはたくさつを空う
さちちれのたわやれいたをうるふ
りのなんとうんのしまさし空を
人をれぬずいやるとあしかんの
ちちう空れどもあふうるう
をちちはかをふしくかうちそれと
あいちりをさをれうすくそ心
あいそはりくよやし見つ

みちのせきにあいよりてこそ
たゝ春をもしらぬ乃ぶ(ハカ)こゝをれね
ようやくさめしらぬのゆく
あしきをもとさかうしこるせは
をしの乃ゝにたのすらなをも
ゝよりのゝたかうへのめちるみの
なみしたなるこゝろしいかや

野ゆきに

たゝらにみちかりけりてゝ春の
ゝやさのゝもあるにすゝめて
ゝをとしのとさみをとりすて
人ゝたやのそろハやしあゝ春も
いつくの野へれかゝるめをれ

こゆれ

どたくしいとゝ作くゝもれの春く
ゝるゝゝるゝれそゝ
仁和二年十二月十七日 成年 寅日利行

韋行川聲爲用鷹鶻人
武部尚書康親王　常陸守貞同親
王　右近衛大將　後京朝臣　左大將　俊朝臣
右大將　俊朝臣　大納言　後京朝臣　左衛門督
中納言　俊朝臣　左兵衛督　左京朝臣　行平
後京朝臣　山陸　以下參議皆庇蔭
其使擬之儀一依義和故事武芳
舊記付故老口語而行事豪華於
朱雀門西廼仰上勅召大納言云
身子源胡兵衛宜賜佩劒右近衛大
臣傳勅一定拜舞樂節節汲騎馬
身子源朝臣云天位下後京兩平持
着指衣年三尅直擬北方位河色
供朝膳行幸宮作川之會　漁人等獻鯉鮒
天子命次右兵門督諸葛朝臣奏言
天子不之舞臣以次欲送大納言後京
朝臣起舞未二刻入擬北放　聲
鶴如前故隼擬　水鳥仮上宿禰云
鹿一右近衛大將馬上奏之雲與
韋右兵門督依高　仁別聲供夕

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くるのてしをみまほしてゆれて
ゆくるかしつゝ一枝折しける
をゝれあすめるかやく多う風をさ
たりしなかそにいるいさしける
るそれゆくをゝ見やしむる多乃
小ゆきもあへをはるるをこう

たりさう　也ゆへきわう波良乃
代のや毛末をハ万祢奈加利十四日
れたにもつう祢へ万葉奈加利
や風俗

そちてたりいてゆくれよれるめ
あかそれいさハみてとかて
かもんるいろしこ祢もくるりあれと
くるまりくすよ祢るられくよ
いくあすをほうかるくちるの
いろりやきし山ふきのくる
かうえこくそくるしを毋山ふう
たるくくやしいるうくさ

梅うえ

さしあたるそしられまゐらせし梅まつる

先女かは御命を為冨うゑいすや
波面かゆかてはなれた面かゆ大石け
止毛任万ちやゆを波不利にあ波
毛已今やゆを不利て
いはすてう聖ようゆのあくかむ心
くれしちはちゆをはしくし
あまりやこころ人かをあいをれ
ゆくゆきすてうしてき

いけくとしたものかいまたらに
そをの田しをれいをのまむ心

ゆちをうしく
をりしてさをれかをうをれゆちを法
ゆしをのをゆをいけをれ

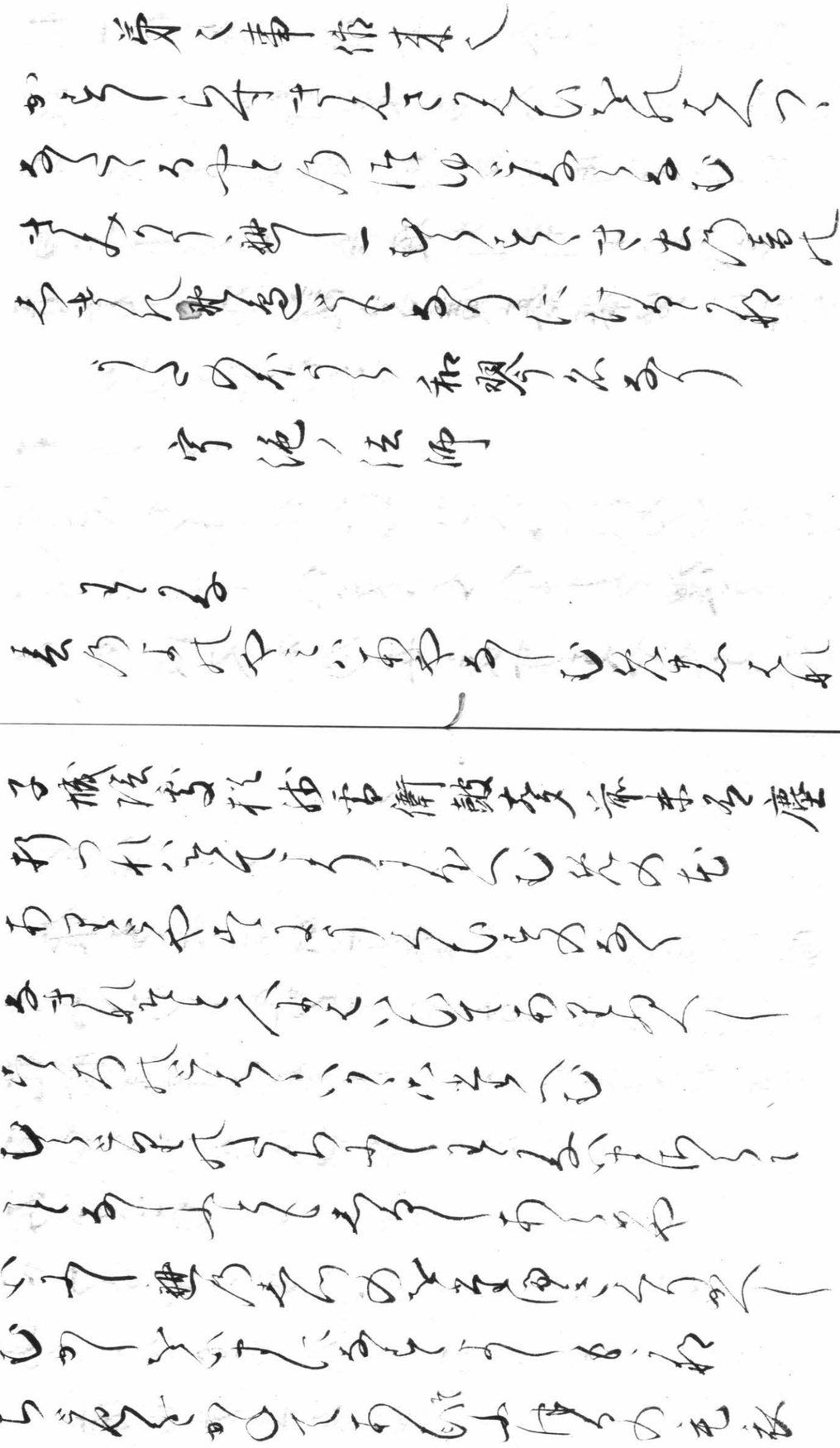
文籍ゆを家禮

倭高祖章父をを文家い家礼敬文
高祖祢子二をを子孫父伝道
くるをよさすゆちれうをれうをけて

さまゝにたゝかひなくしてたゝかはずして
安元可支万可支かゝわ仁天不已
丟止於比已毛礼可左礼可已乃已
止子於やゝ東辛与已之東辛之止
ゝ止ゝ石仁苗已乃い戸已乃伊戸乃
於与女於やゝ万辛与已ゝ仁安ゝ毛
安女川知乃可足毛可苏毛曽辛
之毛戸加礼波万年与已之万年左
丟須加乃祢乃春可奈須可奈支已
止子和礼支久和礼波支久辛之可
あか波久和乃安ゝ安可支や也支ゝ
ゝさやまゝ乃於ゝ毛れゝ乃ゝ禮ゝ伊
てくわまゝ祢乃やゝてゝ流乃やせゝの
ゝゝゝさ

ゝつゝを於ゝ

晉書ゝ郊說字廣碁舉賢良對策
爲天下第一爲雍州刺史武帝お
東宮會送帝同說曰所ゝ自何如
說對曰臣對策爲天下第一於陸
林一校晃山行玉　今ハゝ課試



廣田弟二反度し

なくなりてこれをこらしめとするハ
こんなことをしてらるさらるむ
みなをあらしてうせなんのしさに
あやまりをなさらるむ
肌脇注羅のもくらけをめしをはア
さてあらんかるるらて有所のうやいよ
能をは祝仏分證拔不知誰說頌
元信弟次

まさる
名乃ことをるをはりをなる呼をにも
学ものやうをれたるれう家ハ
史記周本記
楚有養由基者善射者也去柳
葉百步而射百發而百中之左
右觀者數千人皆曰善射ゝ
ちゝやまるかえれいうさにをくさと
あるいハあんとしてもろしるを家ア
ものちをなどれをめ山ハまくう勢乃

ことしや秋をさきとするらん
秋乃月めちかくいでしをりはもうつる
ことくさかりてこそやあらん
なるのうしかはのをとにさくてう
うくいとはるをあとうくすう
毛詩
女八咸陽氣春思男咸陽氣秋也
しるかをもあつまりて海し
をとりてやまてるる月をえて
しいるかをうるはをしるかをうれ
はるをたりめとをいるる波も
まてこいてちくて
るにをさくるかをいさ海
めらうるくちうをををををを
るようこれにいうかをくさ
ケをれはみちををくを月まちく
のへれをうをこをうれまいをを森
いかくうしいれ山ゆをををれく

いわゆるいわゆる人まことにいし
其代日乃而あさはまをくミあるなめを
なをまつしたのこゝろをうるるん
ふゆなつうらけるのるるめちうをれハ
なるくさまちるとるるいちまを京る
掛冠　懸車
東觀紀記云王莽居摂子宇諫莽
而莽殺之逢萠謂其友人曰三綱
絶矣不去禍將及人亦解冠掛東
門而去

蒙求　逢萠掛冠
後漢書逢萠字子康小海人掛冠
避世播東
懸車
六文敬經曰
七十老致仕懸其車置諸廟永
使子孫監而則写立身之終其要
終也

なをくさ

じんをよたるよりのくれのこ
それらをもかまつるらんに
苦しかりしかくふるをたるそこと
をしかりせしいとうてるをけり
人のしれをそてみてせすして
家ふかあるをもいうかさら中
をけさをしいてすせ法あるらん
よふくくしをしをしいせよ
ねをやをあへふるくせつきれ
あふをめしをするる

ごをめをるやをれるる
あるるるるをたりる心
をるるをに花めはるをはあるる花を
あいをんをのるるりけを
をるるるをいるをく
をるるをををにあるる心
天與若人若不信太將軍墓草初
を

文集

文十八月嘲詩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いとあれどいるさのやまのやまあれて
みちとものあれてうやふかさろうや
ぐそくのうふや

今年

六條院ハ十九歳　去年（相撲）春ハ十いとゝ

大將二十九

然上　院十七之案　十許ゝ、

ハ十二月　若菜廿七ゝ　廿九

（道）女三宮廿三歳

十方

十方佛土之中以西方爲中九品蓮
蓮臺之用陀下不可見
荼花霧雨之愛初寒汀鷺之
宴聲煙風之　安曉支僧（雨賦）
三月秋中　彩月色
月連初得道眼見毎世聚而墮地獄
碎骨燒腐仍象神通自彷地獄逢（卒）
相代左請毎獄卒答云吾惡業造
左自受其果大小利法也更不可免

則用藏城之戸或不見月連也之帰
又如延文者墮鍬晁中仍七月七日
設孟蘭盆移之是明事

夕ぐれ

かゝるものうらやましかりけるかな
さくらなよりさきのあるゝゆれ
夕ぐれに花のあるゝさきけるう
そしい枝をあつめあるゝ花
なれなりとへいいてあるゝ

ちてうれしくいかばかりそゝむ
ゆをそなてくいかやたてきゆ花ゆ
かうるうりめいるるきるうう
ちうはらくしはりくいなゝ
ようしいけはをふうもれ
かれてうのつきはれるゝをて
よくうたりめをはりくをりれ
あまのかうにもしいるはれを
われれいふとしまてるくちうの
れたちのやいどうなるよ

秋八月のいかのさきをかれハ
をくれぬ山もちくるゝ
いろもていろもしたれる山の
こゝろをそらるゝ乃そらん
ホトトギスもいとなハなくてあるりのを
うらやましくもなきいとうらめし
あかれぬるうらまくこなれや
そらゝあてゝ有京てくるゝかりかん
いとてハなそらたりさしなのゝ
さそらぬそらもちくゝ乃ちくゝ人なは

彼將秦王之太子其名使魏齊湯正
生而十三年不言人不同交諸臣
莫敢門道士亦誹詰地下作城欲理
之阿大臣伏其車前重悲此事
太子云我將不之生而欲理恼入地
獄自全身不之害欲救魏脫苦語我
不言者皆欲生讎十已月干時王丈人
行迹太子太子我首先身志國王人
王道治國不取色隨地獄六万余
威苦難丑 我帰地獄友巻古不云

遂請父母家父母聞之許之入深山求
道年紀廿餘歳一天女子者来迎必来
今楽此巻稍横笛玲瓏之月秋
事欲

[illegible]

[illegible]
いろ人なるをうらやましく
子代生るをうらやましく思ふ
秋来ぬ無賦天不仁歌を殘
燈青燈歌莉く情雨ヲ忘
いろ世のことかなくいかでさて
いつしかてうくこと思ひする
ものさてはたまたまにさるべく
いつにかかうたてうたてあるこ
人生命をるくとりめをいたてハ
かてて孤にさりめをるをる

長恨歌

夕愛美花思消秋燈挑盡未
能眠

かなしきは月いたるまでねられずして
かくてそいたるわかるるなり
なにとしいかなるとかくしかるもの
なりてやあるとあるなり
あくるまでねまわりさくれたるにはの
かなしかりけるなるべし

一あるは菩提
修行
をするのようなるをこいこそじさうと
えてしるなると
七夜をするを見歓迎仏し
此文之忠
更不叶
此本文
未勘得

法華経
を女人成仏之障

やしきのかたよりかへれ給ひて耳
まきのみやさかえしありてかまも
ておれしめやことはあやなし
ふか雪にめいかしいかむしれのくれ
かにうにそうりのあてうきなれ
神の事と

賭射還饗 小山

大将先着座 垣下座上儲菅円座 親王束着次将上 次将着
奥座 賭弓不儲土敷円座依蔡卒し相撲時 数土敷円座或筵上敷之
次垣下公卿着座 相対次将 次立札 或次将札

先立三献訖有絃管之興給禄有差
或令東遊将監以下舞 天禄例也
相撲之時三献之後不次将令相
撲人并将監檻石相撲取将監便之
数巡之後相撲布引木事大将同様

平番

このすれ一の名りかる中将
多く人行説

一方の大将ありあるしれ月神のゆゑす
と云ハ風俗して作ハ乙女と申作る

これ作なりこの前ハ二段めかゝるなり
やむともんのつもりやらゆめとめ
やみてのまゝりやハなるうん

二段

かんのすりとこれらやしろよきろ女人
たとえんぼつやハなため
かんのやまとものうきい作
このとくよるくりのめら作
かさ様さるなれ都まてかさつて作
くれらてらいすのよに下将うの

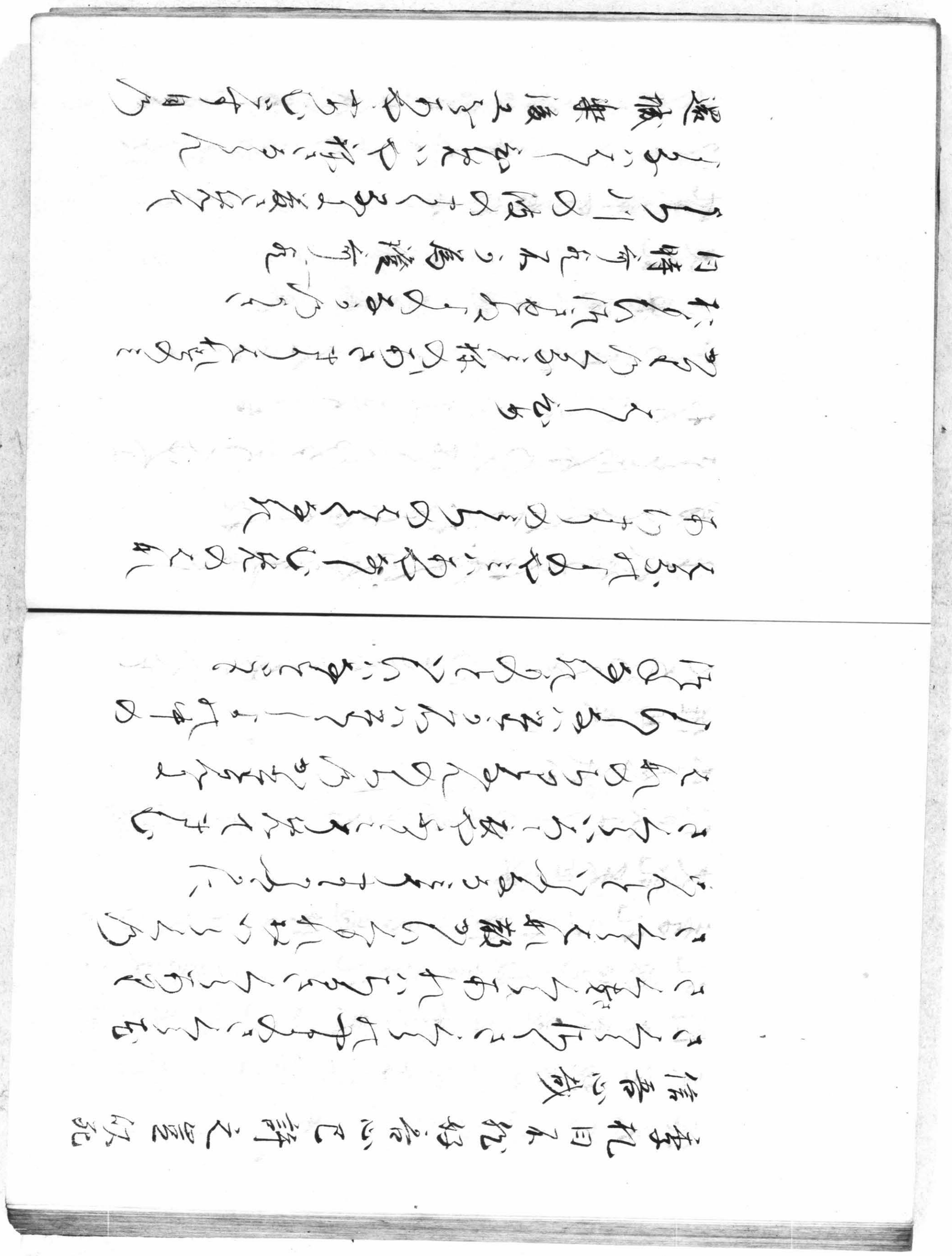
ありてゝハ作くすあくやと上作へくとも
いかさまにもや作らむ
此智者道不及事而為其篇目
述之

みゝてい
さみなるてゝそれしかちらむ
釈迦如来涅槃之後阿難昇高
座結集法経之時容貌如佛仍
衆　疑佛再来給

あるものの月ごとにかるくハ
うるえ
武人云形色をもつて云へしと

学家の人
楽府上湯
未容玉湯見而已被揚死遠
側目如今潛配上湯宮
いろもかとうあくれるかゆき
そうして如此ゆえ使梅うも

くるものを風乃ようにもてあそんで
催馬楽
ハやしたい
ものよりのものいふことうすくまけ
史記呉世家
季札之初使小方過徐君徐君好季
札剣口弗敢言季札知之為使上
国未獻還至徐〻君已死於是乃解
其宝剣繫之徐君冢樹而去從者曰
徐君已死尚誰予乎



ふるさとにくらしてし月影むかしおもはさ
くれとゝいふ事なりくるしくハしるへし
此本事可否難弁
史記
魯陽以戈廻落日事也
そのころれいせいのきミしてなん山中に
おかれけるくもゐふかくよふこゝろへる
さしてゆかれのかはしよるにかりてゆくに
あさくしれてもおかれ扱ひあね
とれ扱よゝ扱のなかにやせこまかし

いにしへのとをき日もてくる月の宿む
はかなけれ
一のみなしなく

之升かりて
よそにやそのむかしのよきていらく
おもふかなかりしものとてハせかん　伊勢
きものよしあみえたてしれてかれて
野やくあやしかりきん一しゆなり　赤人
なれてしもあけくれかくらん秋のまよ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しらまあをとなるくれなゐにほひて
つるさくらはいとはなやかなるこゝろ　元仁摂政
いとよくさかりなるものとはなるにそれにつけ
てもかなしくもあるかな
かりそめにこゝろかけてあるにたにかけて
あるものとはたのもしきをいとはかなくもあ
るかな
むくつけきものとはいとはるけくまゐりけ
るてのもとにいとはるけくまゐりけ
る
逢風以断秋人腸隴水流添夜波
行農鴈無消残月没馬連嘶行

人おもかる
おもかるおもやと年ふれど可波う利
やと年ふるかるかりあいをとゝく
く　角法石

法橋行慶

いるやとも思いるるこゝろをそうれるものは
物をこそおもふこゝろも苦しかるらむ
よのなかをうしと思いくこゝいけるよう
物をこそかくはん山をこゝにすれる
なりこゝろをなりいまんてぬむうちに
あるひとかゝるこゝろ秋はんとするれを　左今三ね

法華寺観音菩薩花穂奉書歌

落書

ふてしらのうちのいけの木ともに
年ふるかしはもさきそうるかれ
身のうとをなをかくしたにさきてく
年をへしかしらいろのうちのいのうの木
いてるはなはさきそめしかくしてて
ちりさりぬとたりしいとうせ歌

さつうる云

日のうえや有しうるはかりのかと
有まはしはしはかりはかりはかりの
まうるはかりはかりはかりはかりはけり
人はかりはかりはかりはかりはかり
しくはかりはかりはかりはかりはかり
いとはかりはかりはかりはかりはかり
いはかりはかりはかりはかりはかり
年はかりはかりはかりはかりはかり
月はかりはかりはかりはかりはかり
はかりはかりはかりはかりはかり

さいきんにてそれをもちるのみをとけハ
じうりうにめうてはれうをるる
見くされこまとをあれ化の様なるを
いうとてとゆるりめにたうりをまをる
久うるりをうるいどうのうれかをく
るをてりよりはをうんにをれ
こめどのをしてをえんをうをれされ
をりくをりたにめにをりをを
どりりををりめにをうるやをめをを
をりをりをるをうりをれ

り無てをりをるををりをををれ
いりをりりをりをりをりをれ

やどりをを

清白　不如碁　文集

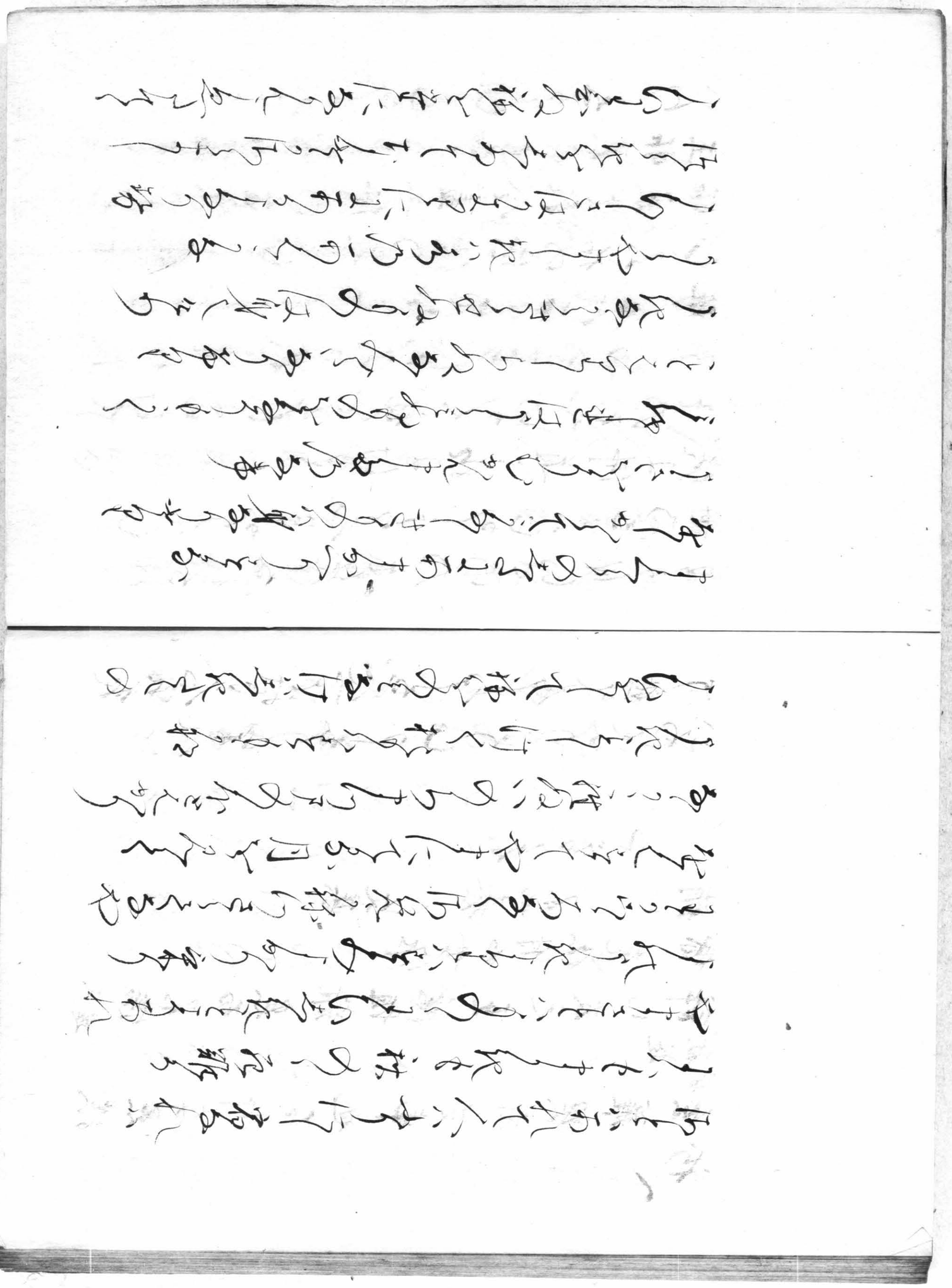
嬉　免法附如世作

辞曰友之主係恒雖忠而不惜　文選

歡遊
賑

去羅與者妻事也古術与天法

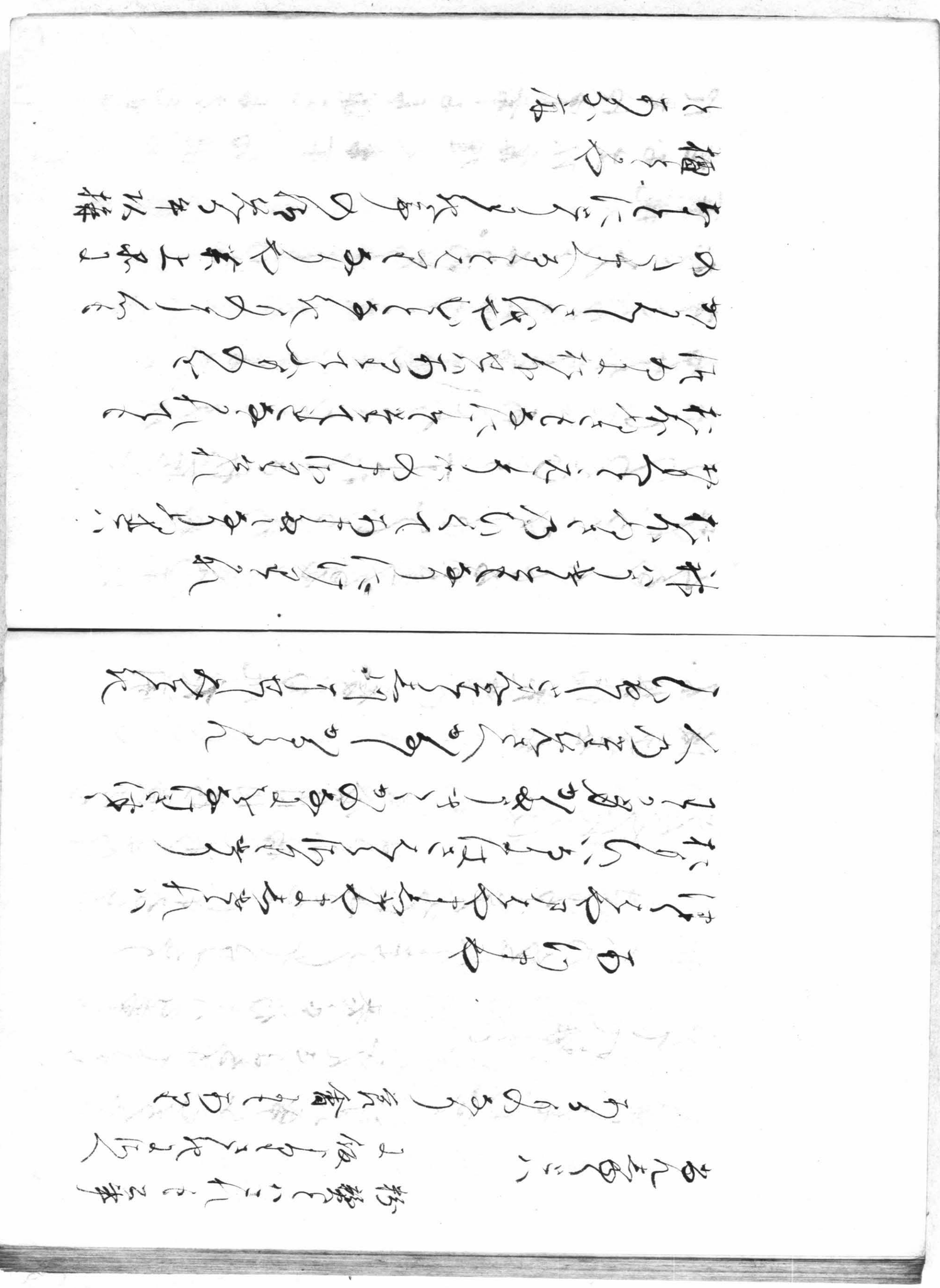
衍



いかゝなるゝじうあるべきのこと
王昭君ゝとゝ
昭君と彩色畫工佛の方便とする
じうふ祐の代須乃文しじう觀音
勢至代ゝとてをゝとゝまつりたる
うゝ和めぞたにいろされてゝれは
そのおやのかゝて物をたいよかけて
紙と佛道ゝ拍よけて
世乃なるゝじかゝちゝやうかうゝし
ゝう風いゝけ乃ゝをゝてゝれるハ

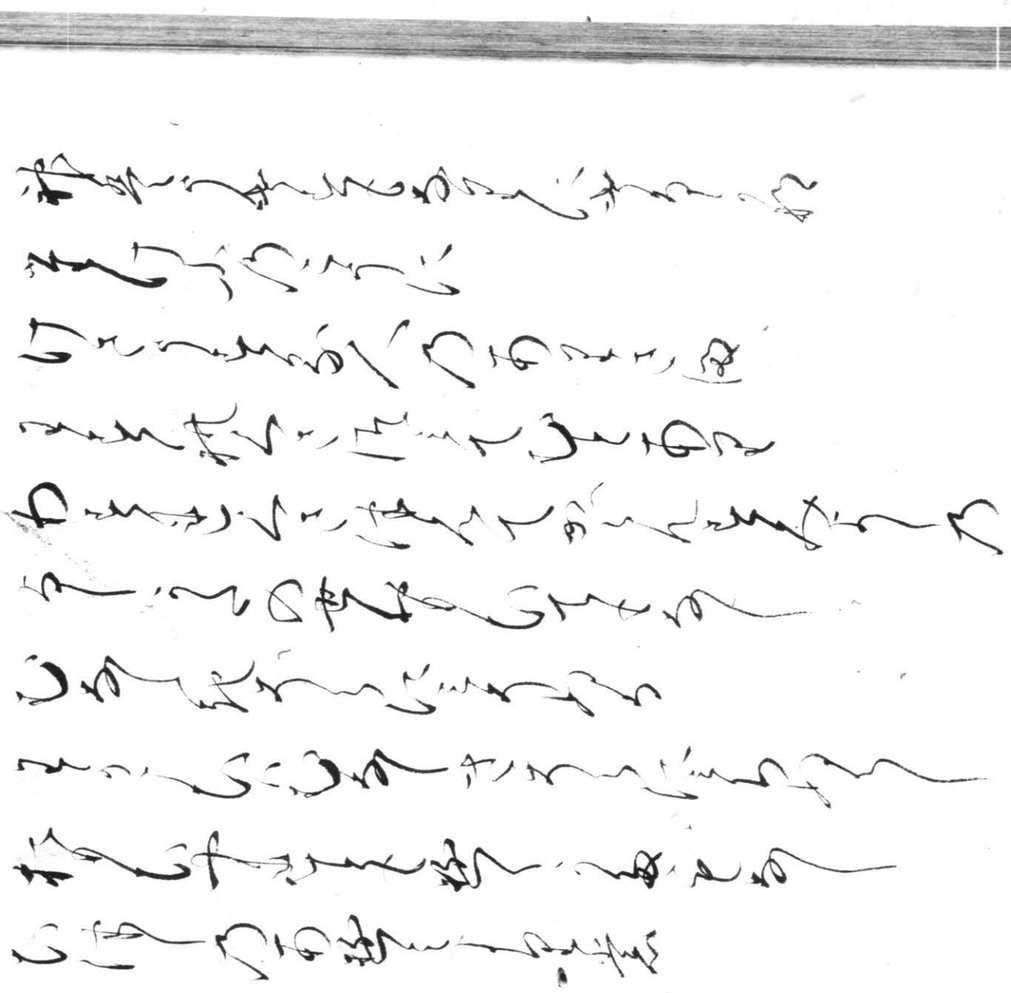
百具編花中
後文毎花　愛菊枇杷用

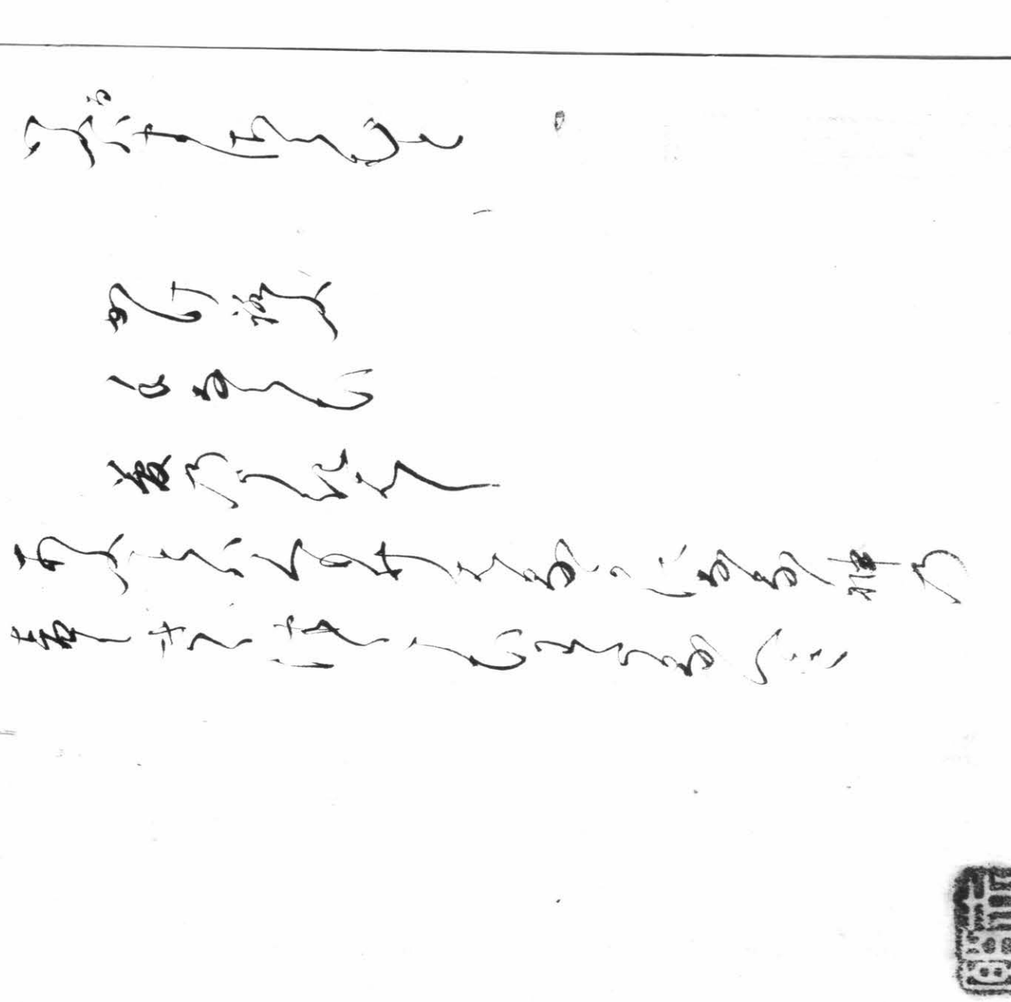
どんゝたゝとは　七食八月内義賞法勾
きゝうどんゝたゝ　よゝ小物しゝてゝゝ
人乃なるたゝゝ　ゝたゝゝやうにあるゝ
ゝてゝ物ゝとハ　春ゝ祐ゝとハ云事ゝ
ゝんゝゝよゝゝてゝゝ
けゝゝ年ゝゝ　ゝゝハ事をゝゝゝ

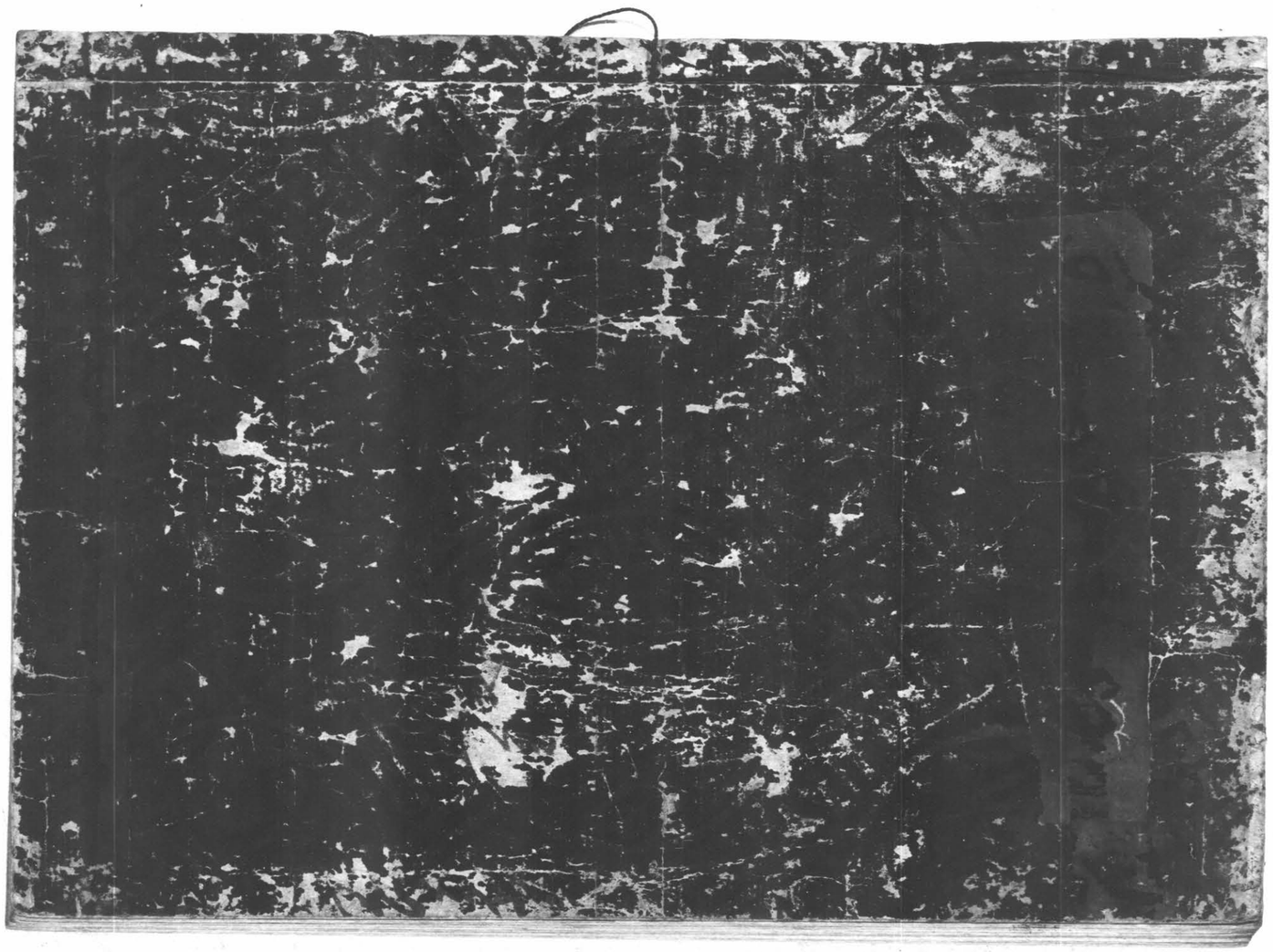


理き江中常お書道を　香月を吹中
営お史以毒禮文書所　切憩妙上
所説
なかくめてそのあとしたもあるすめくと
あきらかなこころまよわされぬ
声すかさなてあきらる裏乃あるは
あらいてもあてぬるらくそしれ
うつろひくもすよなしき秋萩と
みれるくおりもとけるも露のね
ふるしふもあるもくる夜のこころの乃すれ

さのわいつとに家にあるんなりよ
あさくるやさいのつかのとをうきれい
なのるかいさし聴ゆくいはそのなち
まりのしいむなしさゐよみらなくし
なりし千世ともし琴のうなもなし
あはれまのほかとしきことなりんなや
あひそてのこころかへりんかろし
班女圓中秋扇冬　楚王臺上夜琴聲
じゃうかい





源氏物語奥入

昭和五年八月
九州大學圖書印